

個 体 と 自 由

河 瀬 憲 次

よく知られてをる如く、カントは純粹理性の二律背反に於て、二種の因果律を立て
「*Kausalität nach Gesetzen der Natur*」と「*Kausalität durch Freiheit*」として居る。 *Kausalität durch
Freiheit* と謂ふのは、絶對に自發的な原因、即ち更に其の原因の原因と謂ふやうに「*regre-
ssiv*」に溯源することを許さないところの原因を意味するのであるから、此はやがて
Ursachlosigkeit として考へられた自由と同意義であると謂はなければならぬ。然る
にかくの如き意味の自由は、機械的因果の範疇によつて構成せられた經驗界の裡に、
到底見出されないのは當然すぎることであると共に、かかる自由によつては自然科
學的經驗の統一も亦實現され得ないものである。がさればとて單なる *ein leeres Ge-
dankending* として觀て了ふことのできない必然性を備へた概念であると謂はなけれ

ばならぬ。かの機械的因果律の連鎖によつて所謂 *regressive Synthesis* を辿つて行く時いつの目にか、よく吾々は其の完成を期し得やう。

此に於て一見兩立し得ないかの如く見ね、併も其の何れもを否定することができないとするならば、果して此等兩者の關係を如何に決定すべきであらうか。批判哲學は正に其の本領たるべき問題に臨んだと謂はねばならぬであらう。

カントによれば現象は單なる表象として全然物自體ではないが、しかし現象が成立するためには現象ならざる何等かの根據をば必要とする。此は現象ならざるものとして *intelligible Ursache* を謂はるべきものである。今叡智的 *intelligibel* なる意味を非現象的といふ意味に解するならば、一切の經驗的對象は可感的なる一面と、其の根據として考へらるべき叡智的な他面とをもつて居ると觀なければならぬ。従つて吾人も亦此の兩面、即ち經驗的性質と叡智的性質との兩面から考察さるべきものである。勿論叡智的なるものは知覺せられないものであるから、直接には知ることができないが、嚮に述べたごとく一般現象の根抵に叡智的原因たる超驗的對象を措定しなければならぬと同様に、其の經驗的性質に應じて叡智的性質を考へることが出来る。經驗的性質は現象に屬するものとして、勿論機械的因果律の範疇のもとに

立つけれども、之に反して叡智的性質は現象の叡智的原因として全然別箇の範疇即ち自由の因果律のもとに立たなければならぬ。要するに機械的經驗的因果律と自由とは共に同一の事物や行爲に對して、一つは其れ等の現象的方面を、他は叡智的方面を考察することによつて適用し得るものであるとして、前掲の問題を解き得たとするのがカントの立場である。

今此に就いて考へて見るのに解決と謂ふよりは寧ろ問題の紛糾とも謂ふべき點が多々あるではなからうか。叡智的領域は時間の規定を許るざる點に於て、一切の變化、發展、歴史を許るざる世界である。同時にまた *principium individuationis* を容れざる點に於て、一切差別を絶せる世界である。かくの如き世界にのみ自由を局限することは、吾等の有する自由の概念の内容をば餘りに枯淡ならしめるものではなからうか。かくの如き世界に當爲の領域を限定することによつて、吾等の有する道徳的生活の潑瀾たる内容を如何に説明し得るであらうか。かくの如き絶對に靜寂其のものゝ如き世界が如何にして力學的なる經驗界の原因となることができるか。思ふに *Ursachlosigkeit* としての自由は *Selbsttätigkeit* としての自由を意味しなければならぬとするならば叡智的領域の活動性を如何にして説明し得るか。勿論純粹理性

批判の立場よりしてかくの如き自由は唯先驗的自由として單に理念たるに止り、従つて機械的因果律が構成的たるに反し、此は規制的の意味のみを有し得るに過ぎずと警告するものであらう。併しながらかく實踐理性と純粹理性とを峻別するならば未だ自由の因果律と機械的因果律とは充分なる内面的統一のもとに持ち來されたものとは謂ひ難いではなからうか。少くとも二律背反に於て試みられた解決では寧ろ問題を紛糾せしめるものであると謂ひ得るであらう。

ヰキンデルバントは其の Willensfreiheit に於て、カントの或る意味に於て形而上學的とも考へらるべき解釋を排して、此の兩種の因果律の關係をば認識論的に決定し、兩者を統一せうと企圖して居る。即ち彼によれば物自體と現象界とを二個の相異なる實在として、一は自由の因果律によつて他は自然法の因果律によつて夫れ夫れ制約せられたものとして想定するのは、取りも直さず獨斷的哲學の迷宮に彷徨ひ入るに過ぎない。まさに批判哲學の精神を没せるものと謂はなければならぬ。後者の立場よりしては兩種の因果關係に對して取るべき態度は自ら決定せられて唯一つのみ殘されて居る。即ち自然法の因果律——經驗的時間的因果律——と自由の因果律——叡智的無時間的因果律——とを共に realiter として同時に成立せしむるこ

とを排し、唯異れる二個の *Vorstellungsformen* としてののみ考へ、従つて各々の妥當する領域も亦自ら互に限定さるるものとしてののみ許るべきである。

要するに機械的因果律といひ、自由といふも共に吾々の認識目的が立するところの *Betrachtungsweise* を語るものに他ならない。彼にあつては一切の形而上學的色彩から離れてかく解する時、始めて自由の問題が先驗的觀念論に包有され、カントの立場が純粹となるのである。

吾々は今ヅンデルバントに従つたとして果して能く此の問題が解決せられたと謂ふべきであらうか。投げ入れられた *Ariadne* の糸は却つてより大なる *Labyrinth* に導く筈ともなるのではなからうか。蓋し見果し難き多様の事實に當面して原事實を加工する當の形式と、かくの如き原事實との關係を如何に規定すべきであるか。兩者の間に内面的統一を豫想することなくしては、かくの如き形式も無意味であると謂ふ他はないであらう。然らばこの内面的統一は如何なるものであるか。更に尙 *Vorstellungsformen* としての形式は認識目的に應じて夫れ夫れ種類あるべきである。勿論是等の形式は各々妥當の限界と範圍とを有してゐなければならぬが、其の限界内に於ては夫れ夫れ絶對的にして互に冒すべからざるものである。他に對して己

れ自身を維持するところのものである。今是等をアプリアオリと見るならば、かくの如きアプリアオリの Atomismus は其等の主體たる統一體の實存を豫想しなければならぬ。此の統一體を背景として始めてアプリアオリは其の絶對性を維持することができる。然らばかゝる統一體は如何なるものであるか。價值哲學に對して當然に且つ必然に提起せらるべき問題は自ら此に擡頭すると謂はなければならぬ。

かくの如く觀てくるならば、ゾンデルバントが意志自由の問題に於て自由の因果律と經驗的機械的因果律とに對し認識論的考察によつて兩者の關係を規定し了らうとしたことは、寧ろ問題の提供であつても解決とは謂ひ得ないではなからうか。

凡そ認識の立場に即するといふことは謂ふまでもなくカントの *diskursiver Verstand* の立場に立つことであり、反省の立場である。單に此の立場に執する限り反省の窮して達するところ、反省の背後に存するところのものは所詮解き得べくもなき謎でなければならぬ。カントに取つて先驗的自由の概念のごとき單に理念として、*ideal* としてかの *real* なる經驗的機械的因果律に對し、何等積極的意義を有し得ないのは當然である。とは謂へ私は縱令消極的意義を保つに過ぎないものとしての理念で

あつても、純粹理性批判に於けるかゝる形而上學的なるものゝ、想定の中に無限に深くして重要な意味を語つてをることを信するものである。制約より制約へと辿りゆくひたすらなる經驗的因果律の無限の *Regressus* は其の背後に無限なる自己活動として同時にまた靜的なるものとしての絶對自由の *Egressus* に連つて始めて可能となるのではなからうか。かの意志の自由として規定さるべき自由の因果律のごときは直接に絶對的自由との内面的連繫を物語る點に於て機械的因果律が單に抽象の結果たるに反し、一層具體的なる立場にあるものと謂ふべきではなからうか。併し機械的因果律が絶對的自由に於て可能であるとするならば等しく又此に於て自由の因果律と内面的關係を有し得るに到るのではないか。要するに經驗的機械的因果律のもとにあるものも一層高次の立場に於ては自由の形式のもとに把握さるべきものと謂ひ得ないか。謂ふまでもなくかくの如き考察は立場を轉換すべきことを要請するであらう。寔に私は完全に兩種の因果律の關係を捕捉するため殘されたる途は、唯形而上學的考察に存するのみであると信する。

かくの如き形而上學的考察を以て直に批判的精神の蹂躪となし、再び獨斷的形而上學の迷宮に彷徨ひ入るものであるとして非難さるゝならば其は價值哲學の論ず

るところを省みないものと謂ひ得るであらう。或はまたかくの如き形而上學的考察はカントの純粹理性の二律背反に於て採りたる或る意味に於て形而上學的と解せらるべき考察と同一の結果に陥るものではなからうかとの疑念も亦起るであらう。併しながら夫の intelligibler Charakter は畢竟比量的悟性に立つて眺められたものである。恰も自覺に於て對象化され、客觀化された自我を以て直に眞乎の自我と誤認すると同じく、唯單なる影像を捉へたのに過ぎない。さればこそ理念として規制的の意味を有するに止り、一切の變化、發展個性を許るさざる生命なきものとして現する。此に意味する形而上學的考察は飽くまでも立場の轉換を要請する。rationalistische Metaphysik とは全然他の途を歩むものでなければならぬ。然らば斯る形而上學的考察の出發點を何處に求めんとするか。私は今是を個體概念の上に求めたい。

二

普通考へられるごとく、自由とは消極的には外的制約からの獨立を意味し、積極的には自己活動即ち自己の本性に従つてなざるゝ活動を意味して居る。是れ何等かの意味に於て個物が自由であることせられ、自由と個物との間に必然的關係が認めら

れる所以である。同時にまた個物は或る意味に於て客觀界にあるものとして互に他との複雑なる關係のもとに置かるゝのであり、従つて或る立場からは機械的因果律の形式で包むことのできるものである。今二種の因果律の内面的關係を擷ふとするには或る意味に於て兩者を一に體して居ることも考へ得る個物といふ概念の考察から入るのが適當な自然の途の一つではなからうか。

概念はやがてまた判斷である。個物なる概念即ち個體概念の真相は従つてまた個別的判斷の真相でなければならぬ。個別的判斷なるものは直觀的内容を思惟することである。Croeの言葉をかるならば *indiscriminate individualisation* を *discriminate individualisation* に持ち來すことである。今 *discriminate* たらしめるといふことは、取りも直さずあらゆる他との關係において考察して其の一義的意義を捕捉することであるから、此に於て個別的判斷とは直觀的内容をあらゆる他との關係に於て考察し、かくて直觀的内容の個性を明白に把握するところのものでなければならぬ。然るにかく一つの内容を餘すところなく全體との關係に於て擷むことを要求する眞の意味の個別的判斷は、比量的悟性の立場に立つ限りは畢竟單なる *ideal* に過ぎない。此にあつては唯直觀的内容と夫れ夫れ他との關係を示すところのものとしての夫れ夫れの

綜合判斷があるのみである。

凡そ分析判斷の必然性は、其の主辭の裡に、更に精しく謂ふならば矛盾原理の上に見出さるべきものであるが、綜合判斷の必然性は唯々比量的悟性に即する限り所詮は理念として背後に立つところの眞の個別的判斷の裡にのみ見出すことができる。而してかゝる個別的判斷こそは正當なる意味に於て *a priori Synthesis* と謂はるべきものである。此の結論を更らに分析判斷にも擴充することができる。既に述べた如く分析判斷の必然性は矛盾原理に基くものであるが、矛盾原理は更らに反對の統一の上にのみ基礎を有し得る。 *coincidentia oppositorum* は分析判斷を必然たらしむる源泉である。今 *opposition* を以て *distinction* の一種と解するならばかくて *coincidentia oppositorum* はまた *a priori Synthesis* としての眞の個別的判斷と同義であるといふことができるならば分析綜合の各判斷は共に其の必然の根基を其等の背景たるべき眞の個別的判斷に仰ぐと斷ずることができる。經驗的機械的因果律のごときもまた何等かの意味に於て直觀的内容を規定し、綜合判斷を可能ならしむる形式として其の必然性の根據を自ら此に求むるところがなければならぬ。此こそは經驗的因果律の必然なるハイマートといふべきであらう。認識に於て最も直接と考へらるゝ

知覺のごときものも、既に既に一種の綜合判斷として其の背後に絶對的個別判斷の綜合を豫想して居るといふことができる。知覺はまさに無限なる *Intensus* に於てのみ可能であり、同時に認識主觀と客觀との對立も可能とせられる。所與性の範疇と内容との統一の如き、寔に背景として立つかくの如き *a priori Synthesis* に於て始めて其の根據を有することができぬ。

かゝる先天綜合としての眞の個別的判斷は、認識界に於ける種々の必然的なる綜合判斷の統一主體として、其自體何等反對の可能を許すところなき必然的のものでなければならぬ。此にあっては現實が可能であり、可能が現實である。唯かくのごとき背後の統一的主體より抽象して單に比量的悟性の立場に於て事實上の判斷従つて事實上の眞理を見て來るならば所謂矛盾原理に基く永久眞理と異つて何等か反對の可能を許すごとく考へられるのである。現實ではあるが偶然的なものとして見られるのである。唯々比量的悟性の立場を轉換することによつて其の背後に立つ具體者に復歸するを得、眞の個別的判斷即ち眞の個體概念に到り得て此に始めて可能と現實、必然と偶然との搖ぎなき一致に當面することができらざらう。

ライブニッツが *Verité de raison* と *Verité de fait* との二種の眞理を立て、一は必然的

にして其の反對の不可能なるに反して他を以て偶然的にして其の反對も可能であるとしたのは、人間精神のモナッドに於てある。

神のモナッドに於ては兩者は一であり、事實眞理は動きなき必然性を具して顯はれる。寔に眞の個體概念は唯神の裡に、神に於てのみ可能であると謂はねばならぬ。

(個體概念の考察に於て私は Benedetto Croce の論理學に負ふことの非常に大なることを信ずる。併しながらクロッチェが具體的なる純粹概念より出發して最も具體的な個別的判斷即ちカントの所謂知的直觀も亦當然思惟の圈内にあるものとして従つて人間認識の權能に屬するものとしてカントに對する批判を左のごとく述べてをるところの其の根本的豫想に於て私には未だ理會し得ざる節がある。私は飽く迄思惟を以て抽象的であると見従つて具體的立場は唯其の極限としてのみ可能であり、此はまた必然に立場の轉換を必要とするものであることを信ずるのである。

Kant, too, dreamed of an ideal of knowledge, which was not a priori Synthesis, but the intellectual intuition, the perfect adequacy of thought to reality, unattainable by the human spirit. He did not perceive that the intellectual intuition, which he longed for as an impossible ideal, was precisely

The continuous operation of the a priori Synthesis, nor did he think that what is necessary and insuperable cannot be defective.) (p. 230. Logic)

今かくの如く個體概念の論理的機構を觀て來るならば、眞の個物は必然的に全體との無限の關係の上に於て存立し、全體との融合流會に於て始めて自己獨自の面目を保有し得るものと謂はなければならぬ。其の全體との關係は、決してかの數學に於ける普遍對特殊の關係の如く、單に靜的なるものでなく、或はラスクの所謂分析論理 (Analytische Logik) に於ける普遍對特殊の關係が抽象的外的であつて單に Gattungs begriff の Exemplar との關係を語るのみに止り、何等兩者の內的具體的關係を示さないとも異り、寧ろ發出論理 (Emanatische Logik) に於て見出す事のできる關係である。眞の個物に於て全體は始めて其の有機的統一を得、其の一義的實現を見出す事ができる。かくの如き全體は一面無限に動的たると、もに他面自らまた絶對に靜的でもある。個物は夫れ夫れ動的靜靜的動なる全體の必然的なる顯現たることにより、飽くまで個物相互の間に不壞の綜合的統一を現前し、atomism の影は消え失せる。此は價值哲學に於て價值の普遍化、合理化が何等最後の休止點を見出し得ざる無限の Regressus たるに對し、正に其の根基たるべき無限の Egressus でなければならぬ。

かくの如き靜的動動的靜なる境地は自ら其の域に臨むことによつて自證せられ、自得せらるべきものであり従つて眞の個物の把握にはまさに藝術的直觀を要するものとせられることも、個物の本性の自ら必然するところと謂ふことができる。

シュライエハマーベルが其の Monologen に於て獨自性を如實に捕捉すべき受容的 Organ として der Sinn を擧げて一種の künstlerisches Nachleben の如く解し、更に愛を説いて Die höchste Bedingung der eigenen Vollendung im bestimmten Kreise ist allgemeiner Sinn, und dieser, wie kommt er bestehen ohne Liebe?.....Ja Liebe, du anzielende Kraft der Welt! Kein eigenes Leben und keine Bildung ist möglich ohne dich, ohne dich müsst alles in gleich förmige rohe Masse zerfließen! (s. 38. Monologen) と謂つて居る。

私は個體概念の機構を考察し、眞の個體概念は正に比量的悟性の立場の轉換を要請するものであることを説いた。今かゝる概念の機構に就いて云々することは嚴密なる意味に於ては自家撞着であるとも謂び得るであらう。が同時に此のことは決して出來る限り個體概念の真相に近く、其の機構を考察し、象徴的に此を叙述する

ことを禁ずるものとは謂ひ得ない。もしこのことを以て直ちに先概念的なる體驗の世界に禁斷の鋒を投ずるものとして、放膽なる獨斷的形而上學と同視し、もしくは Mysticismus の痴言として、一概に排去することが必ずしも批判的精神を純粹に保持する所以であるとは斷せられないであらう。却つて價值哲學は自らの依つて立つ基礎を省みることによつて自己の立場を支持し得るのではなからうか。

III

個體概念の徹するところ此に動的なる無限の作用の世界が啓ける。かくの如き a priori Synthesis は無限なるが故に他面また動くことなき世界である。動的靜靜的動と謂はねばならぬ。眞の個物はかゝる全體が獨自の相に於て自己を實現せるもの、個物は正に全體其のものと謂ふことができる。眞の個物に於て神を見ることを得る。と同時に此は思惟の世界を飛躍することではなければならぬ。

獨自性の完成を以て人間に賦せられたる課題であると信じたシュライエルマッ
 くハは Ein ganz vollendetes Wesen ist ein Gott, es kann die Last des Lebens nicht ertragen und
 hat nicht in der Welt der Menschheit Raum. (s. 82. Monologen)

とも謂つて居る。

かくの如き境地には嚮に個別的判断の論理的機構に關する考察が到達したごとく、可能と現實、必然と事實との搖らぎなき一致がある。此はまた觀方を換へれば當爲と實在との間隙なき融合とも謂ふことができるであらう。飄々乎として風の如く來り、風の如く去るところ一塵障礙の微だも認め得ざる境に立つて始めて眞の自由があり、自律の根基がある。カントの崇高なる道德的自由の概念の如きも何等かの意味に於て、此の境地に連るものでなければならぬ。もし道德法の絶對的普遍性を高調する餘りに、意志的主觀を全然超越せるものであると解するならば、かくの如き道德法の普遍と意志的主觀の特殊との間に如何にして其の内面的具體的關係を立することができるか。かゝる普遍對特殊の關係は正にかの *Analytische Logik* の立する普遍對特殊の關係といふべく、従つて何等生き生きとした内面的統一を齎すことのできないものである。道德法は生ける意志的主觀を規定し得る方なき單なる形式に過ぎないものとなり、吾々は唯々自己の一切を擧げて——何等内よりの感激なく——道德法に包攝せらるゝ限りに於て道德的たるのみである。かくては自律に代はるに單に他律あるのみ。自由に代はるに唯強制あるのみと謂はねばならぬ。

ジムメルがカントに對して *das individuelle Gesetz* を掲揚して當爲を以て自覺と同種の作用と爲し、更に此を以て生命の統一的全體が現はるゝ一つの *Modus* であると解して *Sollen* と *Sein* との二元的對立に代ふるに *Sollen* と *Wirklichkeit* との對立を以てし此の二者が共に具體的なる *Leben* 即ち能動的個性によつて統一されるを見て、此に兩者の必然的內面的關係を立て、*das jeweilige Sollen ist eine Funktion des toten Lebens der individuelle Persönlichkeit* と言つたのは *Leben* 其のものゝ考察は別として當爲と意志的主觀との關係に對する深い洞察を語つてゐると謂ふことができる。意志と道德法との對立のもとに現する道德的自由のごとき、或は自律のごとき共に皆其の背後の絶對的自由なる *a priori Synthesis* を俟つて始めて可能であると謂はねばならぬ。靜的動動物靜なる天地こそは道德的自由の源泉である。と同時に既に述べた如く一切認識の從つて機械的因果律の根本である。

此の背後にあつて一切を包むものより斷たるゝ限り、認識は消え、道德は滅する他はないであらう。唯認識の立場が絶對の轉換を要するに比し、道德の立場は意志に於て一層直接に絶對に連る。故郷を求めていまだ得ざるものは、是が認識生活であるとするならば、故郷を訪ねて其の門戸に到り得たもの、此は道德的生活である。眞に

故郷を得たもの此こそ絶對無礙の自由にあつて神と一なる宗教的境地でなければならぬ。 „Philosophie ist eigentlich Heimweh, ein Trieb überall zuhause zu sein”

ツギンデルバントが自由の因果律と經驗的因果律との關係を單に *Fachtungungsweise* の相違として認識論的に解決したるに對し、私は其の内面的統一は *a priori Synthesis* の絶對的自由の裡に於てのみ充全に求めらるべきを信ずる者であり、形而上學的考察の必要を痛感する者である。此點に於て、或る意味に於て形而上學的と謂はるべきカントの純粹理性の二律背反の考察の裡に深い意義を認めんとするものである。



個體概念の徹するところ、形而上學的自由とも謂はるべき絶對的自由の境地こそ道徳的自由や經驗的因果律のハイマートである。かくの如き歸結は直にかのライプニッツが一切萬有の目的因及び動力因を以て神に存すると觀た考を、更には其の *monadology* と “*On the ultimate origin of things*” に現はれた處の *moral perfection* と *metaphysical perfection* との全然の一致に關する考を想ひ起させる。尤もよく知らるゝ如くライプニッツの唯一神には獨斷的唯理的色彩の濃厚なるものあり、其の *moral*

perfection 又は metaphysical perfection との全然の一致の必然的結果たる其の樂天觀は餘りに naive の感を抱かしめるものであるとは謂へ、またよく其等の思想に批判的見地からの解釋をも入れ得る餘地があるのであらう。

形而上學的完全が支配するところとせられる物質界は、取りも直さず認識主觀並に其の對象たる客觀界であり、道德的完全の遍流する所謂 "the city of God" とは謂ふまでもなく精神界であつて即ち意志主觀並に其の對象たる道德的當爲の世界である。而して認識界道德界共に其の存立には、其等の背景たる絶對的自由の世界を豫想しなければならぬ。勿論夫れ夫れ實現の様式を異にするものは謂へ、其の基くところ其の根本とするところに於ては同一であると謂ふことができる。

千波萬波を漂へて併も自ら潭々たる深淵は動的靜靜的動なる、絶對的自由の領域である。單に此を靜とのみ見るはスピノーザの substance の如く所謂 akosmische Metaphysik に陥る。もし動とのみ解するならば Regressus の進行が in infinitum にして尙よく其の窮達するところを得ざるものと謂ふべきである。共に抽象的一面的たるを免れない。動いて止まざる歴史の上に不易なる絶對自由の顯現がある。歴史的認識の根抵には Kategorie des konkrit Allgemeinen がなければならぬ。